

ラスキンとモリス：二人の理論と実践の継承と発展

竹 多 亮 子

キーワード：ジョン・ラスキン (John Ruskin), ウィリアム・モリス (William Morris)

はじめに

イギリス・ヴィクトリア朝を代表する美術評論家であり社会改革家でもあったジョン・ラスキン (John Ruskin, 1819-1900) と、彼の思想に大きく影響を受けた美術工芸家であり詩人かつ社会運動家でもあったウィリアム・モリス (William Morris, 1834-96)。この論考では、二人の芸術及び社会に対する思想の軌跡をたどり、その理論と実践について考察したい。

ジョン・ラスキン

ラスキンは、裕福なシェリー酒商人の父ジョン・ジェームス (John James Ruskin : 1785-1864) と、敬虔なプロテスタントである母マーガレット (Margaret Ruskin : 1781-1871) との間に、1819年2月8日、ロンドンのブランズウィック・スクエア、ハンター・ストリート54番地で生まれた。両親はスコットランド出身で、敬虔な福音主義を信仰する傍ら、芸術と旅を愛し、一人息子のラスキンを宗教的に厳しくしつける一方で、溺愛した。幼少期のラスキンは、母とともに聖書講読をし暗唱する毎日を過ごし、10歳になると、近くの学校経営を手掛ける数学教師ジョン・ローバトム (John Rowbotham) と、福音主義の牧師であるエドワード・アンドリュース (Edward Andrews : 1812-77) が家庭教師として雇われた。両親の願いは、大切な一人息子が聖職者となることであった。少年期のラスキンの興味は地質学に向けられ、それは、父がお土産として、湖水地方で地元の地質学者から買ってきた50個の鉱物見本から始まったもので、大学入学まで熱中していた。また芸術にも興味を示し、12歳の頃から絵画教室にも通いだした。13歳の誕生日に、父の友人のヘンリー (Henry Telford) から、当時よく読まれていたサミュエル・ロジャース (Samuel Rogers : 1763-1855) の『Italy』(1822-28) という本をもらい、その中のターナー (Joseph Mallord William Turner : 1775-1851) の版画に感銘を受けた。これが、ラ

スキンの画家ターナーのことを知った最初である。後に美術評論家、社会思想家として成功する鍵となるのは、この幼少期から少年期に培われた教養とあくなき興味である。ラスキンの詳細に観察し分析する能力は地質学研究に基礎を置いており、またその文章力は天性のうまさに加えて、緻密な聖書講読から養われたものである。さらに加えて、一家で何度も行われた国内及び大陸への旅行が、ラスキンの審美眼を育成したのである。それも、当時の貴族や上流階級の人々が行っていた物見遊山的に景勝地に滞在するのは違い、ラスキンの興味が満たされるように、自然をじっくり観察し、スケッチし、鑑賞するといった研究旅行であった。また当時、複製の技術も写真の性能も不完全な時代にあって、絵画や彫刻、建築物など実物をじっくり見てきたことが、ラスキンの研究資料の一部として大いに生かされたのである。厳密な観察分析能力、巧みな文章力、直観的な審美眼、これらが融合して、ラスキンを美術評論家として確固たるものとするのである。

18歳でオックスフォード大学の学寮であるクライスト・チャーチに入ったとき、ラスキンはほっそりした顔つきの、突き出た鼻と赤味がかった髪をした、碧い瞳の華奢な青年であった。いつも茶色いベルベットの襟付きの厚地コートを羽織り、明るいブルーの大きなネックチーフをつけていた。謹厳実直な両親のもとであるが、温室育ちで、幼少の頃から聖書に親しみ、地質学の研究と家族との大陸旅行を愛し、すでに英文学の手ほどきを受け詩作も手掛けていたこの若者は、同年輩の若者と比べて、ある意味単純で純粋でもあったが、しかしその教養の面では、彼らよりもずっと先んじていた。学寮では、高額授業料納入者の特別自費学生として優遇されるとともに、個別指導時には著名な古典学者や考古学者、鉱物学者などから学び、在学生の英詩に対して与えられるニューディギット賞を受賞し、学部生の間に著作 (Poetry of Architecture) も手掛けた。この本は1838年に「カタ・ピューシン：自然によると」(Kata Phusin : According to Nature) というペンネームで出版され、これを『タイムズ誌 (The Times)』は「著者は、芸術家の鑑識眼と手技を持つとともに詩心があり、非常に詩趣のあるエッセイになっている」¹と評した。そして1840年6月22日、画商トーマス・グリフィス (Thomas Griffith) の家で畏敬の画家、ターナー本人と邂逅し、以来その人と作品に魅せられていく。ラスキンの当日の日記には、「きょう紹介されたのは、疑いもなくこの時代における最も素晴らしい人、つまり想像力のすべての才において、情景描写の知識のあらゆる分野において最も優れていると同時に、時の画家であり詩人である J. M. W. ターナーその人である」²と記している。

ラスキンが美術評論家の道を歩むとは誰も想像しなかったが、彼の芸術への興味と愛着はいよいよ増していった。教授陣には相談せず、独自の理念に基づきターナーの素晴らしさを説く『近代画家論』第1巻 (Modern Painters, vol. 1) (1843) を引っ提げて24歳で世に出ると、その緻密な観察眼と文章力、他の追隨を許さない研究資料とで、短期間のうちに成功を収めた。彼の研究対象は絵画美術にとどまらず、建築や建造物、さらにはそれらを包括する社会構造にまで拡大し、1849年に出版された『建築の七燈 (The Seven Lamps of Architecture)』とそれに続く『ヴェネツィアの石 (The Stone of Venice)』(1851-1853) で、彼は若き美術評論家として不動の地位を築いたのである。

ラスキンの分析方法は机上の議論にとどまらず、実際の彫刻や建造物を計測し、スケッチし、記録し、その由来や様式、材質や工法まで調べ上げ、その重要性和価値を見出し、さらには修復や保存方法まで論じるというものであった。

ヴェネツィアでは、1847年に結婚した妻エフィー（Euphemia Gray, Effie Ruskin or Effie Millais : 1828-97）のことなどそっちのけで、人ごみの広場では銀板写真機の前で頭から黒い布をかぶり腰を曲げ、次には梯子に上り建物の柱頭によじ登る、あるいは細部をスケッチするために床に大の字になる。巻尺は絶えず携行し、その記録をノートに写し、時にはぼんやりと物思いにふける。そんなラスキンの姿は、街の子供たちの格好のからかい的となり、乞食はどこへでも彼の後をついて行った。³ 彼の仕事は真に骨の折れる大変なものであったが、1850年3月にいったん終わりをづけ『ヴェネツィアの石（第1巻）』として結実するのである。しかしラスキンの調査研究はさらに続き、1853年までに第2巻、第3巻が刊行される。この本では、ヴェネツィアの栄光と衰退の歴史をその建築様式の中に見出し、その繁栄を極めた時期がゴシック建築の全盛期であるとし、その様式を建築の最高位に位置づけた。第2巻・第6章「ゴシックの本質（The Nature of Gothic）」では、「当初“ゴシック”を非難する言葉であった粗野や不完全さというものが、正しく理解されるなら、（ゴシックは）キリスト教建築の最も高貴な特性の一つであり、しかも高貴であるだけでなく必要不可欠な特性であることを読者に示す」とし、「不完全でない建築が真に高貴たりえないということは、逆説のようであるが、実はそれは極めて重要な真実である」⁴と述べている。また「建築あるいは他の崇高な作品にしろ、不完全でないならば、それは良いものではない」⁵と主張する。ラスキンの言う不完全さとは、建築の仕事全体が優秀な建築家一人の手になるものでない以上、それは職工たちの手仕事にゆだねられ、それが完全に遂行されない可能性があるという点と、また、万物がそれ自体変化を含有しており、「不完全さを追放することは、表現を破壊し、努力を阻止し、活力を麻痺させる」⁶ということの意味している。

近代の建築は、その不完全さを完全にするために、個々の労働者の個性や人間性を埋没させ、より機能的に、より正確に完全性を求め、機械化を進め、その結果、表現は破壊され、努力は阻止され、活力は麻痺し、信仰心や表現力を失い、労働者は単なる機械の歯車の一つとなってしまったのである。そこにはもはや労働の喜びは見いだせない。このような観点から、ラスキンは建築をそれぞれの時代の道徳性の象徴として位置づけ、建築を包括する社会構造にまでその研究は拡大していく。しかし、不幸な結果に終わった結婚生活や、その後の恋愛の不成就による精神破綻など、人生における試練にたびたび見舞われ、それでも旺盛な研究、著作活動を続けた強靱な精神力は、ラスキンの言う“ゴシックの精神力”（the Gothic spirit, the Gothic mind）に匹敵すると思われる。

1850年代には、ラスキンは美術批評に加え、社会改革にも取り組み始める。建築の研究をすることで、その歴史の中の社会問題にも傾倒するようになったため、それをさらに発展させる形で1857年には、『藝術の経済学（The Political Economy of Art）』（1857）として刊行される

二つの講演を行い、1862年には『この最後の者にも (Unto This Last)』(1862)として出版される政治経済に関するエッセイを『コーンヒル誌 (Cornhill Magazine)』に発表する。さらに、『胡麻と百合 (Sesame and Lilies)』(1865)では、読書や本の重要性を、また女性のための教育の役割についても述べている。ラスキンは、その緻密な観察眼で絵画や彫刻を見、建築を見、街を見、社会を見る。そして、ロンドンの街にあふれる夥しい数の醜悪なものに気づくのである。

そして、1871年1月から『フォルス・クラヴィゲラ (Fors Clavigera: Letters to the Workmen and Labourers of Great Britain)』(1871-84)という書簡形式の月刊集を出版し始める。これは、「イギリスの職人と労働者たちへの手紙」という副題がつけられ、かねてより懸念の対象であった社会問題などを、手紙の形を借りて労働者たちに呼びかけようとしたものである。1884年まで出されたこれらの書簡は、話題が美術批評からヨークシャー・ガチョウのパイの料理法に至るまで多岐にわたり、難解な表現や比喩が多用され、思い浮かぶことを散漫に書き連ねたため、テーマは一貫性を欠き、さらに出版物としては宣伝もされず、経済的に成功したとは言えない。しかしラスキンは、イギリスの労働者に向け、自らの理念をこの書簡集で告げ、それがラスキンの理想のコミュニティーである、「セント・ジョージのギルド (St. George's Guild)」の提示でもあった。これは、ラスキンの社会改革の哲学を明示しており、このギルドに対する理念が随所にちりばめられた『フォルス・クラヴィゲラ』は、「セント・ジョージのギルド」を実践に移す際に、実質的な機関誌として利用されたのである。

ラスキンの「セント・ジョージのギルド」の初期の構想は、確実な公益事業のために財産の10分の1を提供するという誓約のもと、男女を問わず協同体を作るというシンプルなものである。その目標は大きく、新たな農業社会が築かれ、「厳しく訓練され、厳格に教育された新しい小作人階級が、所有地に住む郷士 (gentry) 階級の監督下にある土地に確立され」、「機械は廃止され、価格は定められ、新聞の発行は禁止され、文字は規制されることに」なり、「学校、博物館、図書館、家内工業が生まれ」というものであった。自給自足の協同生活が営まれ、充足した暮らし、きれいな空気、見苦しいものはなく生活は洗練され、有用な仕事の知識を兼ね備え、不必要な機械仕事からは解放され、自然の景観は守られ、公園も作られる。これがラスキンの描いた理想郷であった。

そしてラスキンは1871年に資産の10分の1である7,000ポンドを寄贈し「セント・ジョージの基金 (St. George's Fund)」を立ち上げ、1875年には土地を手に入れ、同年7月にはギルドの草案を出版した。こうして彼の理想郷は着々と準備が進められるかに見えた。しかし実際は、資産の10分の1を供出するということを、友人や他の人々、特に一般の労働者に説得することは不可能であった。当時の劣悪な環境下で仕事をしていた労働者のどれだけが、ラスキンの言葉と理想を理解できたろうか。また、ウィリアム・モリスのような裕福な中産階級たちも、ラスキンのギルド構想の実現に関しては懐疑的であった。『フォルス・クラヴィゲラ』に触発されて、マンチェスターの社会慈善家であるトーマス・ホースフォール (Thomas Coghlan Horsfall : 1841-1932) が、労働者のための美術館とモデルハウスを建築しようと提案した手紙に対して、

モリスは、「あなたが美術館の構想を練っておられるのは素晴らしいことです。協力は惜しみませんが、二つの点を完全に誤解なさっています。一つは労働者のためのモデルハウスについてですが、うまくはいかないと思います。まず彼（労働者）が買うのに見合った家具がありません。そしてたとえ同じだけの（家の）広さがあつたとしても、領主が買うのと同じどんな家具を労働者が買えるというのでしょうか」（CL 2-12）⁸と返事を書いている。これは、労働者のためのモデルハウスに、モリス商会の最高級の家具を入れるという提案がなされていたためである。構想の意義は認めるが、労働者の家を“小さな家”にするなら、もう少し自分にもできることがあるとモリスは提案し、さらに美術館の展示内容に関して的を得ていないと述べている。上流階級の掲げる見当違いの理想に対して、モリスは現実的で慎重であることがわかる。現実的に物事を見据えるモリスに対して、ラスキンのギルド構想は単なる浮草のようなものであり、彼は一時しのぎの指導者でしかなかった。「それはほとんど完全に彼の精神の遊び道具であり、満ち足りた小作人と有徳の統治者の理想世界、欠乏も自由もない世界であった。現実には必然的に異なっていた」⁹。かくしてラスキンの社会的ユートピア構想である「セント・ジョージのギルド」はほとんど誰からも賛意が得られず、失望がラスキンに重くのしかかった。また、構想実現に向けては法律上の問題も多々あり、ラスキンの博愛主義的な目的はほとんど注目されなかったのである。

しかし、1878年10月22日に国王諮問機関の上院委員会から、「セント・ジョージのギルド (Guild of St. George)」として認可を受け、その土地を所有するための許可を得ることができ、ギルドの農業計画の一部は実現された。そしてシェフィールドの近くのウォークリーに、博物館のためのコテージと土地の小区画を得ることができた。この博物館は、ギルドのためにラスキンが整備した収蔵品の収容を目的にしたもので、コレクションには版画、石膏像、絵画、スケッチ、金彩手稿本、鉱石、地質学標本やコインなどがある。博物館設立時に、ラスキンはこれらの収蔵品をギルドに寄贈している。また1890年までには収蔵品が多くなり過ぎ、ウォークリー・コテージでは間に合わなくなり、ミアズパークに移設され、その後1963年にレディング大学に移されたが、1985年シェフィールドのノーフォーク・ストリートに“ラスキン・ギャラリー”として戻ってきた。現在はこのラスキンの収蔵品と博物館を、「セント・ジョージのギルド (Guild of St. George)」が委託を受け、その責任を担い保管・管理をしている。またこのギルドは、ラスキンの美的観念と社会思想を紹介するために、教育や公共の利益のための慈善信託として活動を続けている。ラスキンのユートピア的協同体は実現の運びとならず、その構想は達成されなかったが、彼の理念は“ラスキン・ギャラリー”と現在のギルドに受け継がれ、今日に至っている。

ラスキンは、父親の収入と遺産のおかげで、働かずして生きていける不労所得階級にあり、芸術や美術批評、社会活動に没頭できた。その中で、自分がなぜそのような状況でいられるのか自問し始めたとき、ラスキンの社会改革の理念が沸き起こるのである。弊害の多い近代産業社会を解体し、既存の社会システムを改革するというものである。そのために中世のギルドに倣った協同体を作り、生活と労働の質の向上を目指す構想を練ったが、果たして、当時の一般的な労働者の真の苦悩を理解することには遠く及ばなかった。その点が、ラスキンの提唱するユートピア的

協同体が理想の追求のみに潰え、現実的なものとして実を結ばなかった原因だと考えられる。しかし幸いにもラスキンの精神は、実際に自ら商会の経営や労働者の環境整備、社会活動に取り組んだウィリアム・モリスに引き継がれ、アーツ・アンド・クラフツ運動として開花するのである。

ウィリアム・モリス

ウィリアム・モリスは、美術工芸家として活躍する傍ら、古建築物の保全や住宅、環境問題などに関心を示し、それらの保護運動や様々な活動を通して、英国の歴史と文化をいかに自身の時代に反映させ、また次代に継承させていくかという課題に取り組んだ。

モリスが古建築物、特に中世ゴシック建築の素晴らしさに魅せられたのは、1854年、20歳の夏に初めての大陸旅行でベルギー、北フランスを訪れ、ファン・アイク (Van Eyck : 1370-1426) やメムリンク (Hans Memling : 1430/35-95) などの絵画に触れ、アミアン、ポーヴェ、ルーアン、シャルトルの各ゴシック大聖堂を見学した時に遡る。その時の感動を、後年『芸術の目的 (The Aims of Art)』(1886) で次のように記している。「初めてルーアンの街を見たとき、その外観はまだ中世の一部であった。その美しさと歴史とロマンスの渾然たる融合が、どれほど私の心をとらえ支配したかは、とても言葉では言い表せない。これだけは言えるが、過去を振り返ってみても、それはかつて感じた最も素晴らしい喜びであった」(CW 23-85).¹⁰

19歳でオックスフォード大学エクセター・カレッジに入学したモリスは、前述したラスキンの著作『ヴェネツィアの石』を読み、ゴシック建築の壮麗さに目覚め関心を示していた。先の大陸旅行後は、親友のエドワード・バーン・ジョーンズ (Edward Coley Burne-Jones : 1833-98) と一緒にさらにラスキンの著作に親しみ、翌21歳ではバーン・ジョーンズ、フルフォード (William Fulford : 1832-97) とフランスを再訪し、芸術家の道に進むことを決意するのである。この頃から詩作も手掛けるようになり、22歳の時に同人誌『オックスフォード・アンド・ケンブリッジ・マガジン (The Oxford and Cambridge Magazine)』(1856) をベル・アンド・ダルディ社 (Bell and Dalby) より発行する。これは1856年1月号から月刊で12号まで続き、21歳で父の遺産を相続したモリスが、発行費用のほとんどを負担した。そこには様々な論説や詩作など、寄稿した若者の活気で満ち溢れていた。すでに著名な評論家であったラスキンや桂冠詩人のテニスン (Alfred Tennyson : 1809-92) からあたたかい賞賛の言葉をかけられていた。しかし、800部刷られた創刊号から以後の発行部数は次第に減少し、12号で終了してしまった。この同人誌については、当初『兄弟団 (The Brotherhood)』という仮の誌名が考えられており、この名称から、モリスが後に社会活動を推進していくときに重視する、同胞愛や仲間との連帯感といった意識の萌芽を窺うことができる。マッケイル (John William Mackail : 1859-1945) は『モリスの生涯 (The Life of William Morris)』(1899)の中で、モリスが建築家ストリート (George Edmund Street : 1824-81) の事務所で建築修業を始めるこの頃について、「この“兄弟団”は、精神と熱意の緊密な結びつきへと、またすべての計画や見解そして情熱における親密

な仲間との連帯感へと培われていった」¹¹と述べている。

同人誌の続行は頓挫をきたしたが、モリスは詩作を続け、24歳で処女詩集『グウィネヴィアの抗弁 (The Defence of Guenevere and other Poems)』(1858)をベル・アンド・ダルディ社より自費出版する。その後、物語詩『イアソンの生と死 (The Life and Death of Jason)』(1867)、『地上の楽園 (The Earthly Paradise)』(1868-70)3巻を刊行、好評を博し、詩人としての地位を確立する。そしてモリスの詩作及び著作活動は晩年まで続けられることになるのである。

1856年1月から、モリスはオックスフォードのストリート事務所に弟子入りし働き始めたが、その秋の事務所のロンドン移転に伴い、ブルームズベリー地区にバーン・ジョーンズと共同で下宿を始めた。その頃、D. G. ロセッティ (Dante Gabriel Rossetti : 1828-82)をはじめ、ラファエル前派の芸術家やラスキンとも出会うのである。当時、ラスキンは美術評論家としてラファエル前派を擁護したことから、ロセッティたちと親交があり、レッド・ライオン・スクエア17番地のロセッティの住居へもよく出入りしていた。ここは後にモリスとバーン・ジョーンズが移り住むことになるが、バーン・ジョーンズがそこで初めてラスキンに会った時のことを、「我らの英雄と4時間一緒に過ごし・・・大層幸福な気分・・・夢みたいだ」¹²と友達に語っている。モリスは、エクセター・カレッジ在学中に親しんだラスキンの著作からラファエル前派には興味を持っており、ロセッティとの邂逅後はその芸術に心酔し、9か月働いたストリートの建築事務所をまもなく辞め、ロセッティのもとで絵画修業を始めた。1857年夏に、ロセッティがオックスフォード大学の学生会館、オックスフォード・ユニオンの討論室の壁画制作を依頼され、モリスやバーン・ジョーンズらロセッティを中心とするグループの仲間、壁の各区画にアーサー王伝説の10の場面を描くことになった。しかし壁画を仕上げることができたのはモリスとバーン・ジョーンズ、アーサー・ヒューズ (Arthur Hughes : 1832-1915)のみであった。恋人の病気のためにロセッティがロンドンに戻ってしまったことや、建物の状態や構造の問題に加え、皆がフレスコ画に不慣れであったことなどが原因であった。しかし完成したモリスの壁画には人物よりも植物文様が際立ち、彼の得意とする装飾文様の片鱗がうかがわれる。この頃よりモリスは、絵画よりもむしろ装飾芸術へと方向を変えていくことになる。オックスフォード・ユニオンの壁画計画は未完に終わったが、アーサー王伝説の絵のモデルとして、ジェイン・パーデン (Jane Burden : 1839-1914)が見いだされ、一目ぼれしたモリスがこの町娘と結婚することになった。そのための新居づくりを友人たちに依頼したことから、芸術装飾家の商会を創立する提案がなされ、モリス27歳の1861年に、モリス・マーシャル・フォークナー商会 (Morris, Marshall, Faulkner & Co.) が設立されたのである。

この商会は、住宅や教会および公共建築用の壁面装飾、彫刻一般、ステンドグラス、宝石装飾や金工、家具、押し型革細工、刺繍や家庭用品など、あらゆる工芸芸術製品を提供する会社であった。1862年の第2回ロンドン万国博覧会に出品したステンドグラスや家具類が、二つの金賞を獲得するなどして、順調に業績を伸ばしていたが、芸術家集団の経営上の問題から商会を改組し、1875年、モリス単独経営のモリス商会 (Morris & Co.) として再出発した。その後も、モリス

のデザインや経営努力のおかげで事業は拡大し、仕事のすべてをまかなうには手狭になったロンドンの工房を、1881年、ロンドン南部のウィンブルドンから南東約1.5kmのところにあるマートン・アビィに移設した。その敷地は7エーカーあり、ウォンドル川の川辺の柳とポプラに囲まれて、古い水車のある木造の仕事部屋があり、果樹園と菜園もついていた。「モリスはこのマートン・アビィで、自身の制作の範囲を広げ調整することができた。彼は繊維製品の染と捺染を行うことができ、ついにはラグやカーペットとともに、タペストリーをデザインし、制作するという素晴らしい夢を実現することになった」¹³。モリスはマートン・アビィの工房を、自身の理想の工房とするように作り上げ、それを出発点として、モリスの理想は地域へ、社会へと広がっていくのである。

しかし、モリスの理想への探究はこの工房に始まったことではなく、自身の理念を実践に移すための社会活動、政治活動への端緒は数年前から開かれていたのである。モリスの最初の政治的発言は、1876年10月24日、イギリス政府の東方問題（対ロシア政策のためのトルコ支援）に対する抗議文を『デイリー・ニューズ誌（The Daily News）』に投稿したことである。その際の署名は“ウィリアム・モリス、『地上の楽園』の著者”となっている（CL 1-326）。同年12月8日に、この東方問題に関する会合がセント・ジェイムズ・ホールで開催され、主催者にはロバート・ブラウニング（Robert Browning：1812-89）、チャールズ・ダーウィン（Charles Robert Darwin：1809-82）、アンソニー・トロロープ（Anthony Trollope：1815-82）、ラスキンなど著名人が名を連ねていた（CL 1-338）。ここで東方問題協議会（The Eastern Question Association：EQA）が創立され、モリスはその財務委員に選出された。その時のことを、リークの染色会社経営者であるトマス・ウォードル（Thomas Wardle：1831-1909）への手紙で、「我々の会合は大成功だった。私にとってそれはとても荘厳で印象深い出来事であり、人々があんなにも熱狂的だとは想像もできなかったことだ」（CL 1-338）と伝えている。また翌1877年3月5日には、イギリス全域にわたって行われていた、様式の統一化という名の下の大聖堂や教区教会の「修復」に反対する声明文を、『アシニアム誌（Athenaeum）』に投稿する。この投書がきっかけとなりすぐに支持者が集まり、古建築物保護協会（Society for the Protection of Ancient Buildings：SPAB）が設立され、翌1878年6月21日には最初の年次総会が開かれた。この協会は「アンチ・スクレイプ（anti-scrape）」（削り取り反対）というニックネームで呼ばれることになるが、それは中世の聖堂の風化した壁などから石造部分を削り取り、一様になめらかな面に変えてしまうことに反対するというのが由来である。イギリスの歴史と文化そのものである古建築物や遺跡の監視と保護を目的にするこの協会の創立メンバーには、モリスの友人や建築家のみならず、ラスキン、トマス・カーライル（Thomas Carlyle：1795-1881）やジェイムズ・ブライス（James Bryce：1838-1922）など著名な思想家や政治家が数多く名を連ねた。モリスはここでも事務局長を務めるなど、中心的な役割で活躍する。そしてこの協会を提案した彼の理念の基軸となっているのが、ラスキンの著書、『建築の七燈』及び『ヴェネツィアの石』第2巻第6章「ゴシックの本質」である。モリスが自らの出版社ケルムスコット・プレス（Kelmscott Press）から、

1892年にこの『ゴシックの本質』を出版するに際し、序文 (Preface to The Nature of Gothic by John Ruskin) をつけており、それには「何年も前のことであるが、それを私たちが初めて読んだときは、世界が歩むべき新たな道を示しているようだった」と記し、「ここでラスキンが教えてくれるのは、芸術が、労働における人間の喜びの表現である」ということであり、「芸術による労働の神聖化が、現代の我々の目標の一つである」(AWS 1-292~293)¹⁴とし、芸術が労働の喜びの上に成立する理念を学んだとしている。ケルムスコット・プレスは、かねてより中世彩色手稿本に魅せられ収集していたモリスが、当時の装飾本の印刷に飽き足らず、1891年1月に発足させた印刷会社で、自ら文字のデザインや装丁などを手掛け、モリスの作品及びお気に入り本を出版した。この『ゴシックの本質』は、モリスの序文を附して1892年に出版されたものである。またモリスは、1891年、『ペル・メル・ガゼット誌 (The Pall Mall Gazette)』に掲載されたインタビューで、「ゴシックの本質」について、「これは実はその著作全体の核心部分にあたるのです。その中でラスキンは建築について言うべきことのすべてを要約しています」¹⁵と述べ、それがゴシック建築の素晴らしさを、延いてはあらゆる建築を理論的に理解するのに役立つとしている。また前述したラスキンの『建築の七燈』についても、モリスが無意味な修復に反対するに至った理由をそこから得たとしている。ラスキンが『建築の七燈』第6章「記憶の燈 (The Lamp of Memory)」で、「修復については語ることをやめておく。初めから終わりまで虚偽だからである。……我々にはそれ (古建築物) に触れる権利などない。それは、それを建てた工人たちのものであり、我々に続く世代の人々のものだからである」¹⁶と述べ、修復に関しては全く否定的な観念を持っていることによる。それは、建築物が建築家一人の手になるものではなく、石工や職工たちが建築物に生命を吹き込むからである。古建築物は歴史の遺物などではなく、歴史そのものである。破壊的な修復作業が、その独創性も美も台無しにしてしまうことを危惧し、モリスらは修復に代わる保存方法を提案したのである。1877年7月10日に古建築物保護協会からとしてラスキンに宛てた手紙で、「あなたの著書『建築の七燈』からの修復に関する文章を再録したリーフレットを配布するのが良いと、我々は皆考えております。それをご承認いただけますか。それはとても素晴らしく、全ての事を完全に網羅しています」(CL 1-383)と記し、ラスキンの修復に関する文章で人々を啓発したい由を述べている。また、1880年5月26日の手紙では、古建築物保護協会の年次集會に出席して、議長を務め、一言述べてもらいたいと伝えている (CL 1-569)。しかし、ラスキンは議長の件に関しては断ったようである。¹⁷モリスの書簡集には、2487編の手紙が収められており、ラスキンに関する言及が少なからずあるが、モリスから直接ラスキンに宛てたものは数点を数えるのみである。またそれらも、家族を気遣ったり、友人に情熱的に自分の気持ちや見解を吐露したりするといったものではなく、やや儀礼的なもので、ほとんどが古建築物保護協会関連のものである。しかし、1883年4月15日の手紙は、ステンドグラスの技術についてラスキンがバーン・ジョーンズに尋ね、それをバーン・ジョーンズから依頼されたモリスがラスキンに返答したもので、ステンドグラスの技術的な表現が綴られた後で、「マートン・アビの我々の地所でお目にかかれれば嬉しいことは言うまでもありません。……そこに

はまだ美しさが残されていて、(ウォンドル)川の流れも不快ではありません。私はこの地所を綺麗に保つよう努力しており、仕事場においてもそのようにしています」(CL 2-187)と報告し、ラスキンの“労働の喜び”の理念の実践に努めていることを伝えている。しかしこの手紙がラスキンに直接宛てた最後のもので、以後直接の便りは見受けられない。そこからは、ラスキンの影響を多大に受けながらも、袂を分かち、モリス独自の理想に向け歩む姿が想像されるのである。モリスは以後も、詩作、商会運営、芸術活動に加え、講演や社会活動に邁進するが、その理念の源泉はラスキンであった。ではモリスはその芸術理念を、どのように発展させ、具体化し、実践していくのであろうか。

クラフツマンシップとフェローシップ

モリスがマートン・アピィに商会の生産拠点を移した1881年前後から、彼の社会活動が盛んになっており、東方問題協議会や古建築物保護協会の活動に加え、芸術や社会問題に関する講演活動が本格化していく。民衆の芸術である手工芸(小芸術)と、絵画や彫刻などの美術(大芸術)とが分裂して、芸術全体の状況が悪化していると警告する『小芸術(The Lesser Arts)』(1877年12月4日)、産業化以前の工芸品の機能的な素朴さとそれらが自然で理にかなっていることを推奨し、その素晴らしさが名もなき職工たちの手仕事によるものであることを説いた『民衆の芸術(The Art of the People)』(1879年2月19日)などの講演を収録した『芸術の希望と不安(Hopes and Fears for Art)』が1882年に出版される。また1886年の『芸術の目的(The Aims of Art)』(1888年『変化の徴(Signs of Change)』に収録)では、「真の芸術とは世界に対する純粋な祝福である」(CW 23-86)と述べ、小芸術を支えるべき職工や労働者たちが満足して仕事をし、幸福であってこそ、素晴らしい芸術を生み出せると確信しているのである。彼らのクラフツマンシップが芸術の未来の鍵を握るという訳である。モリスにとってのクラフツマンシップとは、職人の技能のみならず、その腕前と魂を存分に披瀝できる環境をも包含したものである。そのクラフツマンシップの追求のために、マートン・アピィの工房を理想へと近づけていく。モリスは、工房の敷地や建物をできるだけ保存しながら整備し、庭園も造った。「その環境の美しさで有名になった工房へは、見学者も訪れた。また工房内部には十分なスペースがあり、きれいな空気と光であふれていた」¹⁸。そして「労働時間は少なく、給与は平均水準より良く、利益配分の制度やボーナスもあった」(CL 2-283)。さらに、「タペストリー織の訓練をする少年たちには食事や宿舍、手当も用意されていた」のである。¹⁹1880年代当時の、富裕者層に搾取されるのが常であった一般的な労働者たちの劣悪な状況とは、比較できないほどの労働環境である。

モリスは『民衆の芸術』で、「真の芸術だと私が理解しているものは、人間の労働における喜びの表現である」(CW 22-42)と述べ、それが彼の芸術観の源泉となっている。人間が機械の歯車の一つになって働いても、そこには労働の喜びは見いだせない。そしてこの概念はまさしくラスキンが提唱したものであった。ラスキンは「ゴシックの本質」の中で、「労働によってのみ思

想は健全にさせられ得るし、思想によってのみ労働は幸福にされ得る。よって二つを分離させることはできない」²⁰と述べ、産業革命後に達成された大量生産のための工場労働を批判する。ラスキンがゴシック建築を擁護し称賛するのは、建造物の素晴らしさに加えて、その歴史に刻まれた人間の営みのためである。建造物の制作主体は建築家ではなく、石を削り積み上げた職人たちにあるとし、ゴシック建築はそれを作り上げた彼ら職人たちの生命と自由の象徴であり、独創性のある仕事の結果である。中世ゴシック建築は「高度な宗教的真摯さや社会的に統一された状態や厳しい敬虔さを表し、君主や権力者の建築とは対照的なキリスト教徒の連帯の建築を表している」²¹。それ故にラスキンは、それらを地道に作り上げた職人たちの集団であるギルドに注目し、そこでは生活と労働の質が確保されているとして推奨したのである。そして自らの理想を求めて、「セント・ジョージのギルド」の構想を練り上げたのである。

モリスもまた、そのようなラスキンの思想に傾倒する。晩年の論説である『いかにして私は社会主義者となったか (How I Became a Socialist)』(1894)で、「私の意味する社会主義とは、富者も貧者もなく、主人も従者もおらず、怠惰な者も働き過ぎの者も、頭のおかしくなるような頭脳労働者も気の滅入るような手工芸人もいない、要するに、すべての人々が平等な状況で暮らし、物事を無駄なく処理し、一人を傷つけることが万人を傷つけることだという自覚を持っているようなそんな社会、つまり公共の福利社会という言葉の究極の実現を目指すことである」(CW 23-277)と語っている。そして「実践的な社会主義に取り組む以前の私にとって、ラスキンは前述の理想に向けての私の先生であった。そして過去を振り返って、こう言わざるを得ない。ラスキンがいなかったなら、20年前はなんと無味乾燥なものであったかと！」(CW 23-279)と述べ、ラスキンの影響の大きさを述懐する。さらに現状の不満に表現を与えることをラスキンを通して学び、モリス自身は「社会主義は必要な変革であり、それを我々の時代にもたらすことは可能であるとの確信を得た」(CW 23-278)のである。しかし一方で、ラスキンの高邁な理想と精神、難解な思索表現が、モリスには非実践的と映ることもあった。モリスが1884年6月24日にロバート・トムソン (Robert Thomson) に宛てた社会主義活動に関する手紙で、「私はラスキンとその著作には大いに敬意を払っていますが、彼は社会主義ではないし、現実的でもないということを第一に理解せねばなりません」(CL 2-305)と述べ、直観的に得た素晴らしい考えと単なる思い付きを混同していると手厳しく、「とにかく、国営ワークショップという彼の考えは、すでに社会主義化された国でのみ実現され得るもので、あるいは彼が、それが可能であると考える方法では、決して効果は得られないと考えます」(CL 2-305)と明言している。ラスキンの思想には深く影響を受けながらも、現実を見据えるモリスの姿が浮かび上がる。ラスキンは芸術だけでなく社会にこそ本質の問題があることを見抜き、その社会の質と芸術の質、さらにはそこに介在する職人や労働者の質の重要性を説くが、ラスキン同様、中世の職人たちの生活や労働の原理を理想としながらも、モリスはそこに階級制度の弊害が存在していたことも認識しており、それでもなお彼らの作品は素晴らしいと訴える。『小芸術』の中で、「自由への希望など全くなかったように見える圧迫された人々の間で、そのような装飾芸術は盛んであった。その当時であって、

そのような人々の間で少なくとも芸術は自由であった」(CW 22-6)と述べ、さらに1879年の講演録『民衆の芸術』では、当時の作品について「素晴らしく繊細で、入念で、創意に富み、これ以上何も言うことのない作品を、私は見たことがある。あえて反論を恐れずに断言するが、……喜びというものがなければ、いかなる人間の器用さをもってしても、このような作品を作り出すことはできない」(CW 22-41)と言う。つまり、中世においては、たとえ封建制度下での圧迫に苦しむことがあったとしても、職人たちはその想像力を駆使して独創的に働いており、そこには労働と創造の喜びがあり、それゆえ芸術は当時最盛期にあったとする。諸芸術の融合である建築は、仲間との協同的な仕事であり、共同生活の中から生まれた調和の精神の結果であり、これがゴシック建築の美と壮麗さを生み出したのである。モリスはそこに見られる仲間との連帯感、フェローシップの観念が最も大切だと考える。さらに『民衆の芸術』で、名もなき職工たちの手仕事、その素朴さと素晴らしさのゆえに後世に残る偉大な芸術たることを説き、「それらは素晴らしい作品であるが、平凡な人々によって作られたものであり、かれらの平凡な日々の労働のうちに作られたものである。その作品ゆえに彼らを尊敬するのだ」と述べ、「少なくとも仕事をしている間は、彼らは不幸ではなかった。そして彼らも我々と同じくほとんど毎日、一日中働いていたのである」(CW 22-40~41)と語る。モリスは古建築物保護協会のための1884年の論説『建築と歴史 (Architecture and History)』(1884)で、「すべての建築の仕事は、協同の仕事である」とし、彼らの仕事は生活状態や心の在り方に影響を受けるため、「協同的な、どの仕事のクラフツマンシップも、その時代とその時代特性に属する」(CW 22-300~301)と明言している。そして本来このような生産者たちを支えるのが、中世の同業者組合であるギルドであった。モリスは1889年の論説『ゴシック建築 (Gothic Architecture)』(1889)で、「建築の仕事は、芸術の調和的で協同的な仕事であり、極上の美術品のすべてを包括する」と言い、「それらの作品は人間の生命の価値を表現するものである」(AWS 1-266)と述べている。ゴシック建築が相互連関的なものであり、それを作り上げた職人たちには「協力的な調和に基づいた手と心の自由があった。これがゴシック建築の精神である」(AWS 1-276)としている。そしてその精神を支えるギルドの中核をなすのが、フェローシップなのである。

モリスのフェローシップの理念は、モリスにより1885年に結成された社会主義同盟 (The Socialist League) の機関紙『コモンウィール (Commonweal)』に1886年11月から翌年1月まで連載された歴史ファンタジー『ジョン・ボールの夢 (A Dream of John Ball)』(1888)に最もよく綴られている。これはモリスの社会主義小説であり、歴史小説であり、ロマンスでもあるが、モリスの中世の社会と生活についての広範な知識が凝縮された歴史絵巻と言えるものである。物語は、19世紀の社会主義者の「私」がある日目覚めると、1381年の農民蜂起、ワット・タイラーの乱の渦中に紛れ込んでおり、そこでその指導者である司祭のジョン・ボールの格調高い説教がなされ、また出陣前夜に美しい教会の中で、来るべき世界についてその彼と「私」が語り合うというものである。ジョン・ボールは演説で、「確かに兄弟たちよ。仲間との連帯は天国であり、それを失うことは地獄だ。仲間との連帯は命であり、それを失うことは死だ。そして、

君たちがこの地上で行うことは仲間との連帯のために行うのだ」(CW 16-230).²² また「仲間との連帯の中で、仲間との連帯のために身体をはって事にあたる者は、今日挫折したかに見えても、実はそうではない」(CW 16-233).²³ そして「仲間との連帯のうちにいる者がすべきことは行動なのだ。夢見ることではない」(CW 16-234)²⁴ と告げ、行動を起こした後は、「仲間との連帯が天国でもこの地上でも確立されるのだ」(CW 16-237)²⁵ と同志たちを鼓舞する。出陣前には「さあ、行くがよい。仲間との連帯の祝福が君たちとともにあらんことを」(CW 16-242)²⁶ と祈り、「仲間との連帯を忘れるな。今日という日に勝利したのも、連帯を望んだからだ」(CW 16-254)²⁷ と、これまでの苦労を思いやり激励する。しかし、ジョン・ポール自身のこれからの運命については、「なん日とたたないうちに、私の魂は聖人たちとの連帯のうちに至福に入るだろうと思う」(CW 16-263)²⁸ と予見している。「私」は、「あなたにもわかっているでしょう。人々の連帯は、これからどんなに多くの試練に耐えねばならぬにしろ、もちこたえるのだということ。……ごらんなさい。この光は<人々の連帯>への希望をかきたてる時代の象徴なのです」(CW 16-284)²⁹ と述べ、ジョン・ポールの身にこれから起こるであろう運命に言及し、それでもその悲劇は決して無駄になることはなく、社会が進展していく希望の光となることを伝えるのである。ジョン・ポールと語り合った後、気を失い、再び目が覚めたときは、ロンドンの自室の中だった。そしてモリスはこの物語の最後の文章を以下のように締めくくる。「私は苦笑いを浮かべ、服を着て、一日の『仕事』と呼ぶもののために支度した。しかし、ジョン・ラスキンをのぞく(彼と同じ社会的地位にいる人で、彼と同じ意見を持つ人はそれほど多くない)多くの人たちは、それを『遊び』と言うのだろう」(CW 16-288).³⁰ モリス自身が投影された「私」が赴く仕事先は、おそらく社会主義活動の場であろう。それは大方の人には仕事として理解できないかもしれないが、ラスキンなら理解してくれると確信しているのである。

ラスキンが目指したのは、中世ゴシック建築の背後にある芸術的、社会的体制であった。産業資本主義が蔓延していなかった当時、たとえ封建制度下においても、職人たちが成し得た素晴らしい芸術活動を甦らせることが理想であった。その理念に共鳴したモリスもまた、自らの実践においてその理念を実現しようと試みた。しかし、産業革命の爛熟期を迎えたイギリス社会は資本主義が確立し、それが商業主義を蔓延させ、分業体制下の工場では粗悪品が大量生産され、労働者たちは劣悪な環境で機械の一部と化し、労働の喜びも意義も見いだせないうちでいた。そのような状況下では素晴らしいクラフツマンシップは育たない。装飾芸術の向上のためには、この負の連鎖を断ち切る必要があり、そのためにはまず労働者たちの意識改革が必要であった。モリスは数々の講演をこなし、労働者たちを啓発しようと努める。たとえば、1883年6月12日のハムステッドでの講演のタイトルは『芸術と民衆 (Art and the People: A Socialist's Protest against Capitalist Brutality; Addressed to the Working Classes)』(1883)であるが、副題の英文は「資本主義の蛮行に対するある社会主義者の抗議；労働者階級のための演説」(AWS 2-382)である。モリスは労働者の解放と教育問題の改善を目指し、さらに労働者の社会的向上によるイギリス社会の前進という目標を掲げるが、そのためには現体制の打倒と社会改革の必要性を痛感す

る。ラスキンも社会的芸術的理論から社会改革の必要性を説いていたが、モリスは実際にそれを実践に移すのである。つまり現体制での実現が無理だと感じたモリスは、社会主義改革によってその体制を打倒し、新社会を築くという理想を抱き、社会主義者となるのである。

1883年1月、民主同盟(The Democratic Federation)に加盟し、翌1884年1月に社会民主同盟(The Social Democratic Federation: SDF)と改名されたこの組織の機関紙『ジャスティス(Justice)』を創刊し、モリスは他の執行部員とともに街頭でこれを販売した。この連盟で集会演説や機関紙発行の資金援助をするが、執行部との見解の相違から12月に脱退する。翌1885年1月、自ら社会主義同盟(The Socialist League)を結成し、その機関紙『コモンウィール(Commonweal)』を創刊する。そこに連載されたのが『ジョン・ボールの夢』であった。以後数年間、この社会主義同盟での活動が続き、モリスの代表作である『ユートピア便り(News from Nowhere)』(1891)が、1890年1月から10月まで『コモンウィール』誌に連載される。同盟のこの機関紙を売るためにモリスは街頭に立ち、そこで演説もこなし。しかし、様々な気質の、しかも改革に熱心で急進的なメンバーとの運営は、時にモリスの理想への希求とは相いれないことも多く、また同盟内の派閥争いも加わり、アナキスト派に機関紙の編集権を奪われるに至り、1890年11月にこの同盟を脱退した。そして再度、ハマスミス社会主義協議会(The Hammersmith Social Society)を結成し、1896年に没するまで、この協議会で精力的に講演や執筆活動に携わるのである。

モリスは社会活動を、詩作、商会経営、デザイン活動などと並行させながら熱心に行うが、それはフェローシップを大切にしながらクラフツマンシップを磨き、装飾芸術の発展を、さらには社会の改善と向上を目指したからである。またモリスの社会主義活動が芸術社会主義と呼ばれるのは、従来の政治や経済政策中心の社会主義を、芸術や文化の領域にまで拡大させたことと、労働や創造の喜びにあふれた芸術の美に最高の価値を置いているためである。ラスキンのユートピア的ギルド構想から出発して、モリスは人間のための真に美しく豊かな社会を築こうと奔走し、その芸術活動、社会活動の実践が萌芽となり、美術と工芸の統合および工芸の復興を目指すアーツ・アンド・クラフツ運動へと発展していく。それは、当時ラスキンのギルド構想に賛同したものが少なからずあり、特にモリスの活躍した装飾芸術分野での手工業者のためのギルドが、近代的な意味で編成されていくことになるからである。その代表が、工芸家などにより1884年3月に創設された「アート・ワーカーズ・ギルド(The Art Workers' Guild)」である。またその理念から出発し、産業デザインに影響を与え、商業生産できる作品の展示を目的にした、アーツ・アンド・クラフツ展協会(The Arts and Crafts Exhibition Society)の第1回展示会が1888年11月1日に開催された。絵画や彫刻などの美術、つまりモリスの言う「大芸術」の展示会が数多く開催されるのに対して、「小芸術」つまり工芸部門の展示会の開催が少ないことから、このアーツ・アンド・クラフツ展の企画がなされ、これが工芸復興を目指すアーツ・アンド・クラフツ運動をけん引していくことになるのである。しかし、この展示会の開催については、資金面や工芸の質の面で、最初は懐疑的な立場をとっていたモリスだが、協力は惜しまなかった。第1

回展示会では、モリス商会の製品やモリス自身の作品を展示し、タピストリー織に関する講演も行った。また翌 1889 年の第 2 回展示会では、商会製品の展示の他、そのカタログに染色技術についての寄稿もしている。さらに 1891 年 11 月 20 日の「アート・ワーカーズ・ギルド」の集会で、建築材料が建築に及ぼす影響についての講演も行っている。美術と工芸は本来統合され、互いに助け合うべきものであるとするモリスの美に対する理念が基盤となり、装飾芸術に新しい舞台を提供したのが、「アーツ・アンド・クラフツ展」であった。それまで商業見本市などの展示に甘んじていた産業デザインの改良や手工芸の復興を目指し、1888 年から毎年開催されていたこの展示会は、1891 年以降は作品の質の保持のため 3 年毎の開催となり、第 1 次世界大戦まで続いた。またその影響は美術工芸教育界にも及び、新しい美術学校の創立や伝統芸術の復興に貢献し、手工業者の相互理解と協力を目指す「アート・ワーカーズ・ギルド」の活動と理念は今も健在である。ラスキンにより種が撒かれ、モリスが水と施肥をしたアーツ・アンド・クラフツ運動がここに開花し、その流れが近代デザインの発展へと、現在まで脈々と受け継がれているのである。

装飾芸術にとって、クラフツマンシップの向上は必要不可欠であり、それを磨き、相互協力体制を築くためにはフェローシップが大切である。モリスにとっては、改革も改革後の社会も、仲間との連帯、フェローシップがなければ意味を成さないものであった。モリスが自ら所属の団体から離脱したり改組したりしたのも、連帯のない所に自分の居場所はないと考えたからであろう。モリスの希求したフェローシップとは、単なる交友や団体ではなく、人間の営みを、美を通して、過去から現在、そして未来へと繋いでいくための、世代を超えた連帯、団結の精神である。そこには、人々の健全で幸福な社会を担うユートピアを夢見たラスキンの思想が根底にある。ラスキンの高尚な理論を基盤として、磐石の意志を共有し実践するのが、モリスのフェローシップの精神であった。ラスキンの追求した、芸術や社会への理想に対する強靱な精神が、モリスの中で醸造され、蒸留され、馥郁たる香りを放ち始めるとき、それはイギリス・ヴィクトリア朝から、現代を生きる我々への最高の芸術、文化の贈り物となるのである。

注

- 1 Hilton, Tim. John Ruskin: The Early Years 1819-1859. New Haven and London: Yale Univ. Press, 2000. p. 53.
- 2 Ibid. p. 55.
- 3 Ibid. p. 144.
- 4 Birch, Dinah. ed. John Ruskin: Selected Writings. New York: Oxford University Press Inc., 2004. p. 48.
- 5 Ibid. p. 49.
- 6 Ibid. p. 49.
- 7 クエンティン・ベル著、出淵敬子訳『ラスキン』晶文社、1989. p. 158.
- 8 本文中のモリスの書簡の引用は、Kelvin, Norman. ed. The Collected Letters of William Morris. 4vols. New Jersey: Princeton University Press, 1984-96. により、以下 CL の略号と巻数・ページ数

を用いて表記する。

- 9 クエンティン・ベル著, 出淵敬子訳 『ラスキン』 p. 158.
- 10 本文中のモリスの作品の引用は, Morris, May. ed. The Collected Works of William Morris. 24vols. London: Routledge/Thoemmes Press, 1992. により, 以下 CK の略号と巻数・ページ数を用いて表記する.
- 11 Mackail, J. W. The Life of William Morris. New York: Dover Publications, Inc., 1995. vol. 1, p. 86.
- 12 フィリップ・ヘンダーソン著, 川端康雄他訳 『ウィリアム・モリス伝』 晶文社, 1990. p. 76.
- 13 ジリアン・ネイラー著, ウィリアム・モリス研究会訳 『ウィリアム・モリス』 講談社, 1990. p. 168.
- 14 本文中のモリスの全集補遺作品の引用は, Morris, May. ed. William Morris: Artist Writer Socialist. 2vols. New York: Russell & Russell, 1966. により, 以下 AWS の略号と巻数・ページ数を用いて表記する.
- 15 ウィリアム・モリス著, 川端康雄訳 『理想の書物』 ちくま学芸文庫, 2006. p. 214.
- 16 John Ruskin: Selected Writings. pp. 25 ~ 26.
- 17 Faulkner, Peter. ed. William Morris: The Critical Heritage. London: Routledge, 1995. p. 190.
- 18 The Life of William Morris. vol. 2, pp. 58 ~ 59.
- 19 Ibid. vol.2, p. 47.
- 20 John Ruskin: Selected Writings. p. 47.
- 21 『ラスキン』 p. 55.
- 22 ウィリアム・モリス著, 横山千晶訳 『ジョン・ボールの夢』 晶文社, 2000. p. 44.
- 23 Ibid. p. 49.
- 24 Ibid. p. 51.
- 25 Ibid. p. 57.
- 26 Ibid. p. 65.
- 27 Ibid. p. 88.
- 28 Ibid. p. 105.
- 29 Ibid. p. 146.
- 30 Ibid. p. 152.

参考文献

- 1 朝日新聞社編 『生活と芸術 - アーツ & クラフツ展 : ウィリアム・モリスから民芸まで』 朝日新聞社, 2008.
- 2 スティーヴン・アダムス著 『アーツアンドクラフツ : ウィリアム・モリス以後の工芸芸術』 野中邦子訳, 美術出版社, 1989.
- 3 荻野昌利著 『歴史を 読む : ヴィクトリア朝の思想と文化』 英宝社, 2005.
- 4 木村竜太著 『フェローシップと歴史の希望』 同志社大学文化学会文化学年報, 2002.
- 5 菅靖子著 『イギリスの社会とデザイン : モリスとモダニズムの政治学』 彩流社, 2005.
- 6 鶴岡真弓著 『装飾の美術文明史』 NHK 出版, 2004.
- 7 ボール・トムスン著 『ウィリアム・モリスの全仕事』 白石和也訳, 岩崎美術社, 1994.
- 8 ジリアン・ネイラー著 『ウィリアム・モリス』 ウィリアム・モリス研究会訳, 講談社, 1990.
- 9 藤田治彦著 『ウィリアム・モリス : 近代デザインの原点』 鹿島出版会, 1996.
- 10 藤田治彦著 『ウィリアム・モリスへの旅』 淡交社, 1996.
- 11 藤田治彦監修 『ウィリアム・モリスとアーツ&クラフツ』 梧桐書院, 2004.
- 12 フィリップ・ヘンダーソン著 『ウィリアム・モリス伝』 川端康雄, 志田均, 永江敦訳, 晶文社, 1990.
- 13 リンダ・バリー著 『ウィリアム・モリスのテキスタイル』 多田稔, 藤田治彦共訳, 岩崎美術社, 1988.
- 14 リンダ・バリー著 『ウィリアム・モリス : 決定版』 多田稔監修, 河出書房新社, 1998.

- 15 クエンティン・ベル著 『ラスキン』 出淵敬子訳, 晶文社, 1989.
- 16 ウィリアム・モリス著 『民衆の芸術』 中橋一夫訳, 岩波書店, 1953.
- 17 ウィリアム・モリス著 『ジョン・ボールの夢』 横山千晶訳, 晶文社, 2000.
- 18 ウィリアム・モリス著 『ユートピア便り』 川端康雄訳, 晶文社, 2003.
- 19 ウィリアム・モリス出版委員会編 『ウィリアム・モリス：ステンドグラス・テキスタイル・壁紙デザイン』 梧桐書院, 2005.
- 20 ウィリアム・モリス著 『理想の書物』 川端康雄訳, ちくま学芸文庫, 2006.
- 21 ジョン・ラスキン著 『建築の七灯』 高橋栄川訳, 岩波文庫, 1997.
- 22 ジョン・ラスキン著 『風景の思想とモラル(近代画家論・風景編)』 内藤史朗訳, 法蔵館, 2002.
- 23 ジョン・ラスキン著 『芸術の真実と教育(近代画家論・原理編)』 内藤史朗訳, 法蔵館, 2003.
- 24 ジョン・ラスキン著 『ヴェネツィアの石 - 建築・装飾とゴシック精神 - 』 内藤史朗訳, 法蔵館, 2006.
- 25 マイケル・ルーイス著 『ゴシック・リバイバル』 粟野修司訳, 英宝社, 2004.
- 26 レイ・ワトキンソン著 『デザイナーとしてのウィリアム・モリス』 羽生正気, 羽生清訳, 岩崎美術社, 1983.
- 27 Birch, Dinah. ed. John Ruskin: Selected Writings. New York: Oxford University Press Inc., 2004.
- 28 Cook, Edward Tyas. The Life of John Ruskin: 1860-1900. (Reprinted from the 1911 ed.) Univ.Press of the Pacific, 2003.
- 29 Faulkner, Peter. Against the Age: An Introduction to William Morris. London: George Allen &Unwin, 1980.
- 30 Faulkner, Peter. ed. William Morris: The Critical Heritage. London: Routledge, 1995.
- 31 Faulkner, Peter. ed. Arts and Crafts Essays: With a Preface by William Morris. Bristol: Thoemmes Press, 1996.
- 32 Henderson, Philip. ed. The Letters of William Morris: To his family and friends. London: Longmans, Green and Co.,1950.
- 33 Henderson, Philip. William Morris. Rev. ed. London: Longmans, Green and Co., 1963.
- 34 Hilton, Tim. John Ruskin: The Early Years 1819-1859. New Haven and London:Yale Univ. Press, 2000.
- 35 Kelvin, Norman. ed. The Collected Letters of William Morris. 4vols. New Jersey: Princeton University Press, 1984-96.
- 36 Mackail, J. W. The Life of William Morris. New York: Dover Publications, Inc., 1995.
- 37 Morris, May. ed. The Collected Works of William Morris. 24vols. London: Routledge/Thoemmes Press, 1992.
- 38 Morris, May. ed. William Morris: Artist Writer Socialist. 2vols. New York: Russell & Russell, 1966.
- 39 Parry, Linda. ed. William Morris. London: Philip Wilson/V&A, 1996.
- 40 Royal Academy of Arts. Pre-Raphaelites and Other Masters. London: Royal Academy of Arts, 2003.
- 41 Ruskin, John. Fors Clavigera: Letters to Workmen and Labourers of Great Britain. Charleston, SC: Biblio Bazaar, LLC, 2010.
- 42 Stuart, William and Hobson, J.A. The Social and Economic Works of John Ruskin. London: Routledge/Thoemmes Press, 1994.
- 43 Thompson, E. P. William Morris: Romantic to Revolutionary. New York: Pantheon Books, 1977.
- 44 Todd, Pamela. Pre-Raphaelites at Home. New York: Watson Guptill Publications, 2001.
- 45 Todd, Pamela. William Morris and the Arts & Crafts Home. London: Thames & Hudson, 2005.